

先端医療と 地域医療の可能性を

大阪警察病院
澤 芳樹院長



——どんな少年だったのですか。

——医学部時代の思い出は。

小学生のころは、小児喘息や腎炎を患い、引込み思案で、外で遊ぶよりも家にこもっていました。三国ヶ丘中学時代にバスケットボール部での経験で大きく変わりましたね。

近畿地区でもトップクラスの実力があり、過酷な練習を重ねるうちに、だんだん体力がつき、2年生の時にキャプテンになつたんです。

バスケットボールを通して、物事を達成するための努力の仕方やチームの動かし方を学びました。その経験があつたからこそ、なんでもがむしやらに取り組むようになり、今までさまざまなマネジメントをする際に役立っています。

懸命に勉強して現役で入学した後、はめを外してしまいましたね。夏はテニス、冬はスキーを楽しみ、先輩の経営するペニションで過ごしているうちに、「こういう生活もいいな」と思うようになりました。しかし、6年生の夏、スイッチを入れ直して猛勉強して国家試験に合格しました。

心臓移植、遺伝子治療、iPS細胞を使った再生医療など、心臓血管外科一筋に40年余、日本の先端医療のトップランナーとして活躍された澤芳樹・大阪大学名誉教授。その第一線から退き、昨年9月に社会医療法人「警和会」

大阪警察病院の院長に就任され、地域医療を担う病院経営に取り組まれています。先端医療を取り入れた地域医療の可能性について澤

院長にお聞きしました。（聞き手・池田知隆）

——どんな病院ですか
大阪警察病院に就任して

大学卒業後41年目にして初めて大学を離れました。教授職に就いていた15年の間、年間約300件だった手術件数が約1000件まで増えました。後輩たちも十分に育ち、私なりにやり切ったとの思いもあります。当院に来てからは、心不全を改善するために、心臓のみならず、足先の血管治療の大切さを痛感し、新たに形成外科や糖尿病、内科、看護師を含めた「足学」という新領域に取り組んでいます。また、がん治療での精神的なケアを重視しています。病院職員のエネルギーを結集するためには「ボトルアップ」型の組織運営をするなど新しい挑戦を始めていますが、私はほどくかく、走り続けるとダメなんです。

当院は1937（昭和12）年9月に開設し、80余年の歴史があり、地域から厚い信頼を受けています。「公的」の病院です。警察関係の医療業務も受け入れてきたことから、強さとやさしさを備え、「だれ一人として医療を断らない」精神も浸透しています。職員のフットワークもい。巨大な大学病院とは異なり、これから地域医療を大きく発展させ、住民の皆さん



心臓移植手術を行う澤 芳樹院長

もともと頭で覚えるよりも身体で覚えるほどで、手先の器用さには自信があり、外科分野に進むことについて迷いはありませんでした

——心臓血管外科を選択した理由は。

もともと頭で覚えるよりも身体で覚えるほどで、手先の器用さには自信があり、外科分野に進むことについて迷いはありませんでした

心臓外科への道

